



Title	『講座スラブ・ユーラシア学』批評と応答
Citation	スラブ研究, 56, 215-243
Issue Date	2009
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/39233
Type	bulletin (article)
Note	書評特集
File Information	56-009.pdf



[Instructions for use](#)

[書評特集]

『講座 スラヴ・ユーラシア学』批評と応答

2008年1月から3月にかけて、北海道大学スラヴ研究センター監修による『講座 スラヴ・ユーラシア学』全三巻⁽¹⁾が講談社から刊行された。この講座は、旧ソ連・東欧地域を単に旧社会主義圏というだけではない新しい分析視角や括り方で論じることを目的としており、21世紀COEプログラム「スラヴ・ユーラシア学の構築：中域圏と地球化」（2003～2007年度）の成果であるのみならず⁽²⁾、今後のスラヴ・ユーラシア研究のいくつかの方向性を提示しようとする試みであった。

この試みが成功しているかどうかを検証すべく、2008年10月11日、ロシア・東欧関係の4学会が開かれる時期に合わせて、名古屋学院大学で「スラヴ・ユーラシア研究の将来を考える：『講座 スラヴ・ユーラシア学』合評会」が開かれた（同大学とスラヴ研究センターの共催）。本特集は、合評会での3人の評者によるコメントと、三巻の編者によるリプライに大幅な加筆修正を加えたものである。名古屋学院大学の家本博一教授、合評会の司会者を務められた木村汎・拓殖大学客員教授、評者の選定にご協力くださった伊東孝之・早稲田大学教授に深くお礼を申し述べたい。

なお本講座については、塩川伸明氏による含蓄豊かな書評が既に発表されており⁽³⁾、以下の編者の応答の一部ではこの書評も意識されている。読者には、塩川氏の書評も併せて読むことをお勧めしたい。また、本文中ではすべて敬称略とさせていただくことをお断りしておく。

(宇山智彦)

批評(1) 久保 慶一

ここでは、評価、批判、今後の課題という3つの点から、評者の見解を述べたい。

1. 評価

本講座の諸論文は力作ぞろいであり、まさにスラヴ・ユーラシア研究の最先端が集められている。この『講座』が試みている方法論上の問題提起は刺激的であり、大変興味深いものである。評者としてはスラヴ・ユーラシア地域研究をより多面的で豊かなものにしていくた

-
- 1 家田修編『開かれた地域研究へ：中域圏と地球化（講座 スラヴ・ユーラシア学1）』講談社、2008年1月；宇山智彦編『地域認識論：多民族空間の構造と表象（講座 スラヴ・ユーラシア学2）』講談社、2008年2月；松里公孝編『ユーラシア：帝国の大陸（講座 スラヴ・ユーラシア学3）』講談社、2008年3月。
 - 2 21世紀COEプログラムと本講座の関係については次を参照。家田修「スラヴ・ユーラシア学の構築：スラヴ研究センター21世紀COEプログラムの試み」『アジア経済』49巻9号、2008年、45-54頁。
 - 3 『ロシア史研究』83号、2008年、79-85頁。

めの出発点としてこの方法論的な試みを歓迎し支持したい。

「中域圏」概念を中心とする第1巻は、地域研究者にとって、根本的なスタンスの変更あるいは修正を迫るものである。中域圏概念を提示された地域研究者は、空間を開かれたものとしてとらえ、そこで重層的に作用するさまざまな力に目を向け、自らの分析課題に応じて柔軟かつ戦略的に研究対象地域を設定することを求められている。こうした「中域圏」概念にもとづく「地域研究」における「地域」は、もはや所与・自明のものではなく、研究者によって意識的に設定され、その設定自体の必然性・重要性が説明されなければならない。評者は「中域圏」概念が含意するこうした方法論上の提唱に全面的に賛同する。

第2巻のテーマである「地域認識」は、地域の形成にとって重要な要素であり、第1巻と関連する。研究対象の地域の所与性・自明性を疑うこと(第1巻)は、その地域が1つの地域として認識されるようになったのはなぜかを問うこと(第2巻)につながるからである(その逆も真である)。第2巻については、評者は以下の2点をとくに高く評価したい。第1に、序論においてオリエンタリズム、構築主義の議論と本巻の議論の関係が明快に論じられており、国際的な理論状況における本巻の理論的な位置づけが明確である。第2に、本巻は文学、歴史学、人類学、美術史など人文系の多くの分野の著者による論文が集められているが、問題意識を共有すれば、そうした諸分野が共同で研究を行い、1つの研究対象(本巻の場合は地域認識)を多面的に明らかにすることが可能であることを示した。第1巻でも論じられていたように、本講座は、研究対象の地域の境界線だけでなく、学問分野の境界線をも打破することが目的であると宣言している。評者はとりわけ第2巻の諸論文が、学問分野の境界線の打破に成功していると考える。

第3巻では帝国論が展開されている。スラブ・ユーラシアの歴史において帝国という支配形態が圧倒的の大部分を占めてきたことに鑑みて、帝国を分析することの重要性、その研究上の意義(国民史学・民族解放史学の相対化など)は明らかであり、評者も帝国論をスラブ・ユーラシア研究の1つの柱とすることを強く支持する。

2. 批判

このように『講座』全体の問題提起や方法論上の提言を支持することを示したうえで、若干、批判的な意見も述べてみたい。

評者が三巻を通して読んで最も残念だったのは、それぞれの巻に掲載された個々の論文の側から、事例分析を意識的に全体の的方法論的、理論的問題関心に結びつけ、講座全体としての方法論・理論的な発展へとつなげようとするものが少なかったことである。たとえば第1巻では、冒頭で「中域圏」についての理論化の試みがなされている。家田論文は中域圏について3つの地域形成力という分析枠組みを提示し、中域圏の形成と変動に関する比較分析の枠組みを示した。松里論文は中域圏についてコアとペリフェリー、そしてマクロ・システムという分析枠組みを提示し、3つの中域圏における3つの異なるイシューについてその枠組みを適用し、やはり比較分析の可能性を示した。しかし、こうした分析枠組みは、その後の諸論文ではほとんど言及されていない。かろうじて前田論文が分析結果を「中域圏」の多層性の問題に関連づける試みを最後に行い、また三谷論文が、言語行動の分析結果を「内的地

域形成力」・「外的地域形成力」という概念に結びつけるにとどまっている。

宇山は第2巻冒頭でスラブ・ユーラシア地域におけるオリエンタリズム概念の可能性と限界についてすぐれた論考を示しているが、個々の事例分析の結果がオリエンタリズム論に対してどのような示唆を与えるかを論じた章はなく、第5章の高倉論文が構築主義—本質主義を意識した考察を行うにとどまっている。

第3巻は私見では個別研究を全体の理論・方法論に結びつけようという努力が最も行われている巻であり、松里論文のほかに、第2章の志田論文が、個別の事例分析を全体の帝国論、跨境論の研究アジェンダと関係付け、跨境論を帝国境界統治研究に応用する具体的な方法について提言を行っているし、第3章の中村論文が個別の詩人の事例分析に入る前に自身のソ連論、帝国論を展開し、第7章の服部論文は跨境史の研究推進について若干の提言を行っている。しかしその他の章では、帝国が考察対象となっていたり跨境がキーワードになっていたりで序論の理論枠組を受けた事例分析とはいえるものの、個々の事例分析をもとに方法論・理論の発展を目指す意欲はあまり感じられなかった。

もちろん、全体を統括する視点から、個々の論文を意味づける作業は各巻序文において見事に行われている。しかし評者はそれだけでは不足ではないかと考える。たとえていうならば、本講座の序論と諸論文のあいだには、トップ・ダウンの関係（プロジェクトのリーダーが個々の研究を位置づけ、全体的な方法論と関連付ける）はあるが、ボトム・アップの関係（事例分析者が分析結果をもとに理論・分析概念・方法論の精緻化や修正をおこなう）がほとんど見られないように感じた。「中域圏」「地域認識」「帝国論」「跨境」といった分析概念が今後のスラブ・ユーラシア研究の基礎となるためには、個々の事例研究を行う分析者の側からの「ボトム・アップ」の動き、理論や方法論と事例分析のより緊密な相互作用が不可欠であると考えている。

ここでいくつかの個別的な問題提起をしてみたい。まず、第3巻で提示されている「帝国」概念についてである。松里は、冷戦後の世界を考察する上で帝国が「共通概念」になっているというが、本当にそうだろうか。松里はその根拠として藤原やネグリ・ハートの議論を援用しているが、それらが現状分析として正しいか、それを「帝国」と呼ぶことが妥当か、という点については学界のコンセンサスは必ずしも存在しないように思われる。たとえば松里が援用しているリーヴェンは、近年の「帝国」概念の拡張に対してむしろ批判的である。冷戦終焉後のスラブ・ユーラシア地域の現状を分析するうえで、「帝国」概念はどこまで有効なのだろうか。松里は、帝国論の汎用性の高さが歴史の時空間を越えた比較、類型化を可能にすると述べる。そして実際に第1章において清・ブリテン・ロシアを比較して時空間を越えた比較・類型化を行っており、自らの主張を実証して見せている。しかし松里の論文でも冷戦後のスラブ・ユーラシアの現状は分析の対象となっておらず、第3巻のなかのその他の論文も、現状分析の概念として「帝国」概念が有効だということを示すには至っていないように思われる。「帝国」概念が現状分析概念として有効であると主張するのであれば、歴史的に実在した帝国の分析だけではなく、スラブ・ユーラシア地域の現状を「帝国」概念を適用して分析する章があればよかったように思う。

つぎに「帝国」と「メガ地域」の関係について考えてみたい。本講座の特色の1つはスラブ・

ユーラシア地域をいくつかの中域圏からなるメガ地域ととらえている点にあるが、第3巻で強調される「帝国」は、「多法域性」が特徴とされており、この意味で帝国は、いくつかの特色ある中域圏からなるメガ地域としての性格も有しているように思われる。そのように理解してよいとすれば、帝国論とメガ地域論はどう違うのか（それとも同じなのか）。歴史研究（歴史的に実在した帝国の研究）と現状研究（現在のスラブ・ユーラシア地域の研究）の違いという理解がありえそうだが、第1巻では中域圏概念を歴史研究に適用しているし、帝国論が現状分析概念として有効だという主張とも矛盾する。中域圏／メガ地域論と帝国論の関係について本講座の編者がどのように考えているのかを明らかにしてほしい。

これに関連して1点、本講座の構成のバランスについて批判的な見解を述べたい。第1巻冒頭で家田は、第1巻、第2巻が周縁ないし周辺を通してスラブ・ユーラシアを論ずるのに対し、第3巻では地域の求心力であるロシア（強調は評者）の帝国性が分析の中核にすえられると述べている。しかし実際に第3巻の内容を見てみると、ほとんどが帝国の周縁の研究であり、スラブ・ユーラシアというメガ地域の「求心力」に関する分析はあまり行われていない。この意味で、本講座は、全体としてスラブ・ユーラシア地域の周縁あるいは境界地域に偏りすぎではないかという印象が残った。メガ地域の「求心力」の問題は、本講座のタイトルである「スラブ・ユーラシア学」の存在意義そのものにかかわる。じつに多様な諸地域（諸中域圏）を内部に含む「スラブ・ユーラシア」を一つの地域（メガ地域）と呼ぶことはそもそも妥当／必要なのか。スラブ・ユーラシア地域の「求心力」を分析し明らかにすることは、この根本的な問いに答えることでもある。この残された重要な課題に対し、今後の「スラブ・ユーラシア学」が正面から取り組んでいくことを期待したい。

最後に方法論について。「中域圏」概念の有用性が、「地域研究」においてしばしば無自覚に所与とされてきた「地域」の設定そのものを意識化することにあるとすれば、「中域圏」概念の適用において、研究者は、なぜある地域・空間を「中域圏」と設定するのかという問題に自覚的にならなければならない。研究者は、どのような条件のもとである空間を「中域圏」と見なすことができるのか。本講座第1巻は、じつはこの最も根本的な問題にあまりはっきりと答えていない。それは、空間を「開かれた」磁場としてとらえ、実体化することを避けることを目指す本講座の趣旨からすれば当然なのかもしれない。各研究者に独自に、そして自由に「中域圏」を設定する余地を残すためにも、あまり限定的な定義・操作化は実際的ではないことはよくわかる。しかし他方で、この問いが等閑視されてしまうならば、ある「地域」あるいは「空間」を対象として設定すること自体により意識的・自覚的・戦略的であるべきとする本講座の趣旨は薄れてしまうのではないかと考える。この点について本講座の編者の考えを聞いてみたい。

3. 今後の課題

結論にかえて、今回の講座で提示された諸概念を基礎とした今後のスラブ・ユーラシア研究の課題について、若干私見を述べたい。これは本来評者のような若手がやるべきこと（やれること）ではないかもしれないが、批判をした者の責任として、上の批判的見解を建設的な提言へとつなげる評者のささやかな試みと理解していただきたい。

評者はとりわけ今後の課題として「比較研究と理論化へ」という点を提唱したい。本講座

では、同一の視座から複数の事例を体系的に比較する具体的な分析がほとんどなかった。例外は2つの松里論文であり、第1巻では3つのイシューについて3つの異なる中域圏が比較分析されており、第3巻では3つの帝国が比較されている。しかしその他の論文でそうした比較は行われていないし、また1つの巻の中の諸論文を集めても、時期、地域、分析視角と方法があまりにも異なっているために、体系的な比較が行われているとは残念ながらいえない。したがって今後は、とりわけ、アドホックな比較ではなく、体系的な比較研究が求められる。もし本講座が「スラブ・ユーラシア学」を構築しようとするのであれば、個別の事例研究を集めるだけでなく、「スラブ・ユーラシア」の全体像を示すことが求められるだろう。アドホックな比較ではなく体系的な比較を行うことによって、先端的な方法論にもとづき（したがって「面白くない教科書」にはならない）、しかもスラブ・ユーラシアの全体像を読者に示すような研究が可能となるように思われる。

比較の視座の設定においては、本講座で得られた知見・成果を反映させることが可能であろう。たとえば境界線が勝手に動くことで自らの意思に関係なく跨境することになる人々・地域がいるという第3巻・服部論文の指摘は、評者が専門とするバルカン地域の事例にもかなりあてはまるものであり、この視座はスラブ・ユーラシア地域全体の比較研究の視座として重要であると考えられる。たとえば境界線の度重なる移動が跨境地域の人々のアイデンティティ、制度などに与えた影響について比較研究をすると面白いのではないか。このほかにも比較の視座やテーマについては本講座のなかに多数の刺激的なアイデアが含まれており、それらをいちいち指摘することは紙面の制約上できないが、こうした形で研究を体系的な比較のプロジェクトとして発展させることが可能であるし望ましいと考える。

つぎに、本巻で提起されたさまざまな概念についての理論化を進める必要性である。本講座では方法論、分析概念の提示は行われたが、具体的な内容を持つ理論的言明を生み出すには至っていないように思われる。中域圏でいえば、スラブ・ユーラシアという1つの広大なメガ地域を構成するさまざまな中域圏の形成、中域圏内部のダイナミクス、メガ地域と中域圏のあいだの相互作用などの諸側面について、さらなる理論化が可能ではないかと考える。たとえば松里論文で示された枠組みをさらに発展させれば、中域圏においてある地域がコアになる（なった）のはなぜか、といった問いについて一定の理論的知見を蓄積していくことが可能かもしれない。

あるいは第2巻についていえば、諸論文をあらためて整理すると、少なくとも以下のような諸点を含む、いくつかの問題系が存在するように思われる。①何を使って分析するか（方法論）、②自己認識としての地域認識（→内的地域形成力、アイデンティティ形成）、③他者認識としての地域認識（支配者から見た被支配者、被支配者から見た支配者など、支配-被支配の関係、外国から見た地域、地域からみた外国など、国際関係の一ファクターとしての地域認識）、④独立変数としての地域認識（地域認識が政治、政策、行動にどのような影響を与えるか）、⑤従属変数としての地域認識（地域認識は何によって規定され、影響されるか）。これらの問題系ごとに研究の知見を蓄積して理論化し、欧米の理論の批判、修正を発信していくことが可能であろう。そうした作業が今後のスラブ・ユーラシア研究に求められているのではないかと考える。

第3巻において服部論文が指摘しているように、こうした比較や理論化の作業は、言語や資料収集の制約から、研究者が単独で行うことはまず不可能であり、異なる言語と地域研究のノウハウ、そして異なる学問分野を身につけた研究者が問題意識と分析概念をしっかりと共有して行う共同研究が不可欠である。日本、世界のスラブ・ユーラシア研究者の間に広大で緊密なネットワークを有するスラブ研究センターがこうした共同研究・比較研究においてリーダーシップを発揮し、「スラブ・ユーラシア学」をさらに推進することへの期待を表明して、評者の議論の締めくくりとしたい。

批評(2) 西山 克典

『講座 スラブ・ユーラシア学』では、ペレストロイカからソ連崩壊を経て一気に急速に進展した研究が集約されており、今後のスラブ・ユーラシア研究の方向性を大胆に提示する試みがなされている。ここでは、掲載された各論文の内容を具体的に論評するのではなく、中域圏、地域認識と表象、帝国論などといった『講座』全三巻で提示されている研究の志向、方法=コンセプト、それらに基づく具体的な成果について述べ、私との関連で言えば、ロシアの帝国論と中央ユーラシア史に関わる幾つかの論点を中心に、スラブ・ユーラシア研究の将来と拓かれつつある新しい「知」の地平の可能性について忌憚のない論議をしたい。

『講座』第1巻(家田修編)には、「開かれた地域研究へ:中域圏と地球化」という題が付され、ここで『講座』全3巻の意図と構成の全体の見取り図が提示されている。家田は、スラブ・ユーラシア学の対象とする地域を、まず旧社会主義圏と特定し、それを「開かれた空間」として理解していくことを提唱する(I-11~13 以下、ローマ数字で巻をアラビア数字で頁を示す)。その際、この地域は「今、単なる移行や民主化ではとらえきれない大きな変貌の最中にある。しかも、その変貌の様は実に多様であり、社会や文化の奥深くにまで及んでいる」との認識を示し(I-14)、「脱社会主義諸国」という後ろ向きの名称では、「地域の包括的な像を映し出すには程遠い」と指摘し、対象としての「スラブ・ユーラシア」を、「歴史空間としてスラブ諸民族が比較的優勢であった、あるいは現在優勢であるという地域的限定性に基づいて、スラブ・ユーラシアを用いている」、と定義している。ここには「スラブ的」でない国家や地域も、つまりグルジアやハンガリーなども含め、スラブ・ユーラシア学の不可欠の構成要素であるとする(I-15)。

「開かれた空間」として、対象としての「スラブ・ユーラシア」をこのように設定し、家田は、この「複合的で多層なスラブ・ユーラシア」を分析する「切り口」として、「求心、遠心、統合、認識、跨境、まなざしなどの切り口によりスラブ・ユーラシアを多面的に分析し、最終的には「帝国」論として総合することが目指される」と、本講座の全体像をしめす(I-16)。そのうえで、「地域形成—地域をどう設定するか」「地域認識—地域の意味論」「帝国—大きくくりの地域」がスラブ・ユーラシア学の「土台」とする(I-17)。

このような全体構成のもとで、第1巻で、「中域圏」という新しい分析概念が提示され、スラブ・ユーラシアの西部に東欧中域圏、南部に中央ユーラシア中域圏、東部にシベリア・

極東中域圏が提起され、この「中域圏」概念の応用可能性と分析射程が検証される。第2巻は宇山の編集の下に「地域認識論」を、第3巻は松里編で「帝国の大陸」としてのユーラシアが扱われると説明される。中域圏としての東欧は第1巻で、中央ユーラシアは第2巻で、シベリア・極東は第3巻で扱われ、各巻で「周縁ないし周辺を通して論ずるという迂回的方向性」をとったのに対し、第3巻は「ロシア帝国総体」が分析の中核に据えられていると、『講座』の全体の構成が提示されている(I-18~19)。

ソ連を中心とする社会主義体制が崩壊して荒々しく登場した「開かれた空間」に向かい合うこの「中域圏」の理論が、十分な研究成果を約束できるかが研究の方向をうらなう重要なポイントになる。「中域圏」のこの理論は、スラブ・ユーラシア地域研究の新しい動向を支える鍵であり、先に挙げた三つの中域圏(meso-area)とmega-areaとしての「スラブ・ユーラシア地域」は、第3巻で帝国論として総合されることになる。

ここでは、オリエンタリズムと地域認識論、中央ユーラシア研究に関する論考を収めた第2巻、中域圏、地域認識と表象、帝国論を扱った第3巻を中心に、ロシア帝国史と中央ユーラシア史に関する論考から感じたことを、いくつかの点で雑駁であるが述べてみたい。

1. 歴史を貫く「汎用性」?

この『講座』では、松里が様々な帝国論を紹介し、その理論を援用し、「中域圏」と「多法域性」という概念に基づき、歴史を「帝国」でとらえる理論の枠組みを提示している。その際、この理論の前近代から近現代、そして現在に至る「汎用性」が強調されている。しかし、この「汎用性」に関しては、一定の留保が必要であろう。

近年、盛んに論議されている「帝国」論には、二つの傾向がある。一つは、山本有造編『帝国の研究：原理・類型・関係』(名古屋大学出版会、2003年)で、もう一つは、歴史学研究会編『帝国への新たな視座：歴史研究の地平から』(青木書店、2005年)である。松里の「帝国」論は、前者の系列にあり、帝国を前近代から現在まで一貫して歴史に通用できる、つまり「汎用性」のある理論として、提示している。

しかし、「帝国」論の汎用性に関しては、後者の木畑洋一のように19世紀後半から20世紀と厳密に時代区分するのではないとしても、一定の留保と限定が必要であろう。まず、帝国論の適用される枠組みを、16世紀のスペイン帝国の興隆から、20世紀の半ばのアジア・アフリカ諸国の独立を経てソ連の崩壊と冷戦の終了をもって終わった、5世紀にわたる時代の枠組みで比較・考証すべきであろう。この枠組みで、「主権」と「民主主義」、「国民国家」と民族主義との拮抗と交錯、地域の近代国家への統合のなかで、「帝国」論はより有効に問題提起できると考えられる。

第二に、冷戦の終了、9・11テロ、米国のアフガニスタン・イラクへの進攻、プーチン政権下での「帝国」への志向から、ユーラシア＝「帝國的空間」つまり、「ユーラシアにおいては帝国が今日に至るまで一貫して支配的な国家の形態である」とされている(III-19~20)。しかし、この性急な汎用性を求める断言とは異なり、ユーラシアでは、新しい世界とその秩序が、つまり新たな「文明」が模索され、「民族」が主張される可動的状況にあり、“ab imperio”「帝国を離れて」という状況ではないだろうか。

2. 中心・周縁構造の不在？

「中域圏」に基づくスラブ・ユーラシア論では、中域圏を包摂するメガ地域としてスラブ・ユーラシアが構想されている。しかし、このスラブ・ユーラシア論では、中心・周縁という基本的とも思える視点が後景に退いている。家田はこの「複合的で多層なスラブ・ユーラシア」を分析する「切り口」として「求心、遠心、統合、認識、跨境、まなざしなど」を挙げ、最終的に「帝国」論として統合すると構想するが (I-16)、「求心、遠心、統合」は、中心・周縁構造の前提なしには認識できない。前田弘毅が「単純な中心・周縁二元論」でなく、「「帝国の中心」を周辺との連関性により俯瞰的に観察」することを求めるのも (I-169)、この前提のうえであろう。

本書では、「中域圏」がスラブ・ユーラシア地域の周縁に設定され、それが「開かれた空間」として様々な要因の交錯する可動的磁場と認識される。だが、それらの「中域圏」は単に並存するのでは勿論なく、立体・構造的に統合される「中心」が想定されねばならない。ここでは、「中心 core」を担い体現した「秩序」が何であるか分析し示す努力が希薄となり、「中心」なき「周縁」の「中域圏」論との感を呈している。この「中心」が体現した秩序が何であるかが追求されないと、ツァーリズム＝「白い帝国」と反帝国主義を掲げた「赤い帝国」との関係性（継承と断絶）、比較が困難になる。両者の「断絶」としてのロシア「革命」の歴史的位相が不明となる。

今後、「中域圏」の設定で著しく進展した「周縁」研究が、翻って「中心」研究を促進・活性化させ、中心＝周縁の総体的関係の新たな認識、つまり「帝国」研究へと進展することを期待している。

3. 跨境的アプローチと「心象地理」の可能性

この『講座』が「中域圏」というキー概念を駆使し個々の地域をとりあげ、地域研究と地域認識へ研究の地平を大きく広げたことは疑いない。

まず、方法論として跨境論的アプローチが提起され、ここでは「開かれた空間」としてとらえることで優れた方法論が提示され、その成果が窺える。志田恭子のベッサラビア論考が秀逸である (III-83, 101)。今後、この跨境論的アプローチを、さらに以下のように他の分野へも拡大し、挑発し「帝国」のイメージを豊かにすることができよう。

- (a) 社会文化的「跨境」へ。社会ヒエラルヒー、身分・階層の移動と編成としての「帝国」。
- (b) 帝国秩序における宗教文化的な「跨境」へ。「同化」と「異化」の体系としての「帝国」。
- (c) 実態的移動の研究分野では、農民の出稼ぎといった伝統的研究テーマから、タタール人やユダヤ人の帝国での活動、西部でのドイツやハプスブルグ帝国へのスラブ人の移動と就労、極東での朝鮮人・中国人・日本人の進出、戦時での動員と捕虜、ムスリムや中国人の徴用など「帝国」の内と外にわたる移動＝「跨境」のなかにある「帝国」。

跨境論とともに、地域認識論と地域表象論でも目覚しい成果が第2巻の福間、塚崎、第3巻の望月論文にみられる。しかし、20世紀初めから第一次大戦前夜に帝国地理学協会の学者の編集により刊行された地理書『ロシア』(Россия. Полное географическое описание нашего отечества.)全19巻から、どれだけ脱しているのか、ソ連での社会主義計画経済に

動員された「地域」と地域区分への批判的検討はあるのか。これは旧「帝国」の地理「表象」への回帰か、あるいは批判的克服なのであろうか。ロシアの中央農業地帯を扱った『ロシア』第2巻の巻頭に掲げられたФ.И. チュチェフの詩、ペテルブルグを含む北西沿海湖地方を対象にした同第3巻でのプーシキンの「青銅の騎士」の地理表象との関連が問われる。

4. オリエンタリズムの継承と超克

宇山は『講座』第2巻で、E.W. サイドのオリエンタリズム論の不備と中央ユーラシア研究との関係を説明し、中央ユーラシア（中央アジア、コーカサス、ヴォルガ・ウラル地域）の事例に即して、ロシア・オリエンタリズムの方向性＝特質を探っている(II-20)。そこでは①ロシアにおける「二重のオリエンタリズム」と、②ムスリムへの「概して強い不信感」、エスノ・ボナパルティズム的政策、軍人による研究が多いことなど指摘され、③中央アジアからのロシアやヨーロッパ認識の解明がなされ、④中央ユーラシアとロシアのあいだでの地域認識や民族意識の共鳴と齟齬の関係も明らかにされていると指摘する。

ここでは、オリエンタリズムのロシア「帝国」的特質として、①、②が挙げられ、サイドのオリエンタリズム批判の克服への志向と成果として③、④が指摘されている。これは、全体的な優れた総括となっている。

ここでオリエンタリズムが、帝政ロシア・ソ連社会の東方諸民族に深い影響を与え、今日まで深く根づいてきたことが、様々なところで確認される。しかし、単なる確認を超えて、帝政ロシアとソ連におけるオリエンタリズム、帝国主義への批判を掲げたソ連における「知」の体系をソ連共産党のマルクス主義、ソヴェト東洋学の問題を含め検討し、分析する必要がある。この「知」の体系を、「帝国」の秩序とイデオロギーのなかで、オリエンタリズムの継承・持続との親和性のなかで、解析していくことが課題でもあろう。

5. 複合君主制から総督制を通じての「帝国論」——一つの方法

『講座』第3巻で、松里は「中域圏」にもとづきロシア帝国論を具体的に展開している。「帝国の本質を多法域国家と考える歴史学の動向を踏まえ」(III-20) 総督制が複合君主制の機能を代行した(III-48)、総督制を「複合君主国が地域間の対称性を失って、空間的位階制に基づく帝国に移行しつつある兆候」ととらえ(III-49)、「複合君主制を代行する総督制」の視点から、ロシア帝国論を展開していく。

松里の「帝国」論の基調は、山本有造編『帝国の研究』にある。その第1章「「帝国」とはなにか」(山本有造)、第2章「帝国史の脈絡」(杉山正明)、第6章「複合君主制帝国」(山本正)に依拠し、イングランド、スコットランド、アイルランドの複合君主国からブリテン帝国—海洋帝国を築いた歴史の過程を基調に、ロシア帝国論を「総督制」を梃子に展開している。ここでの「帝国」像は、ジュニア・パートナーとしてのヴォルガ・ウラル地域、ウクライナ(左岸)を提示しており、「円錐状の帝国」ではなく「多元的」な像である。中心・周縁の新たな認識を迫り、「総督制」という視点からの「帝国」論が提起されていることを評価したい。

ここでは、提起された総督制の研究が、辺境への総督の任命と権限と取り巻く時代状況、異動と勤務する辺境の特性、さらに総督を頂点とする辺境統治の「知」の体系の究明へ進み、中心(両首都)への任命と、さらに中枢と辺境統治の関係性も問われねばならない。

帝国は、そのイデオロギーと文化・信仰、中枢での社会編成、地方と周縁の統治と統合など広域にわたる総体的な存在であり、対象に応じ多様な方法で分析することが必要であり、かつ有効であろう。その点で、「中域圏」＝総督制、そしてロシア帝国論へ進む論定は、万能の帝国論ではなく、決して最後ではなくフロントを行く方法であるとしても、その方法の一つであろう。

結びにかえて

『講座』全三巻で示された「スラブ・ユーラシア学」の志向と方法、さらに、そこに収められた成果を、全体として高く評価したい。

第一に、帝国論は、スラブ・ユーラシア研究に限らず、他の研究分野でも広く論じられており、知的交流の架橋の機能を果たす。この「帝国」論を、世界史を貫く「汎用性」で説くか、一定の時代の枠で限定し論じるかはさて置き、「中域圏」として開かれた空間を統合する「帝国」論が、他分野への知的「触媒」となり、研究を促進することを期待している。

第二に、本『講座』は、専ら、ソ連の崩壊と新しい「帝国」への志向—プーチンのロシア、ブッシュの米国—の中で開かれた空間＝周縁の研究分析に基づいている。この研究成果と方法が、従来の「中心」からなされ蓄積された研究、国民＝民族の枠での研究の革新と促進へと、「周縁」から「中心」に迫ることを期待したい。

最後に last but not least, 研究を支える「学問の既存ディシプリン間の壁を融解させる」意欲と「研究者は、本来、跨境者なのである」という松里の立場に (III-31)、私自身、評論者として共感し、「中域圏」として展開された地域の認識論と表象論などで示された方法の可能性を確認して、結びたい。

批評 (3) 鳥山 祐介

1. 評価

本講座に収められた論文は、各分野の最先端の研究成果であり、いずれも非常に読み応えがある。また、文学や文化に関する論文が数多く収録されている点は、ロシア文学・文化を研究する評者の立場からも大いに注目される点である。

これら文学・文化関連の論文は、単に「ロシア人作家によって書かれた文学作品を分析対象としている」といった当該地域との表層的な結びつきのみによって収録され、歴史や政治を扱った論文と偶然隣り合いつつ論集に華を添えるという存在ではない。ここで特筆すべきは、文学・文化研究の成果を、地域研究の欠かせない一要素として有機的に組み込むという方針が鮮明に打ち出されていることである。そうした意識は、「文学論が学際的地域研究を深化させ、学際的研究によって文学研究自身も新たな意味づけを獲得するというのは、スラブ・ユーラシア学の重要な特徴である」(第1巻序文)、「多くの章で、歴史家は文化を最大限論じているし、文学者は歴史や政治に、最大限、踏み込んでいる」(第3巻序章)といった記述などがよく示している。

文学・文化研究と地域研究が結びつく必然性をとりわけよく示すのが、「地域認識」を扱った第2巻の諸論文や、第3巻に設けられた「心象地理」という部である。第2巻序章で宇山が整理するように、構築主義的アプローチを前提として受け入れることは現代の人文科学では既に常識となっており、特定の地域を研究するに当たっても、対象となる地理的枠組みの自明性を問い直すことが常に求められる。こうした前提に立つとき、イメージの探求を本領とする文化・文学研究は、地域研究の要となる可能性を秘めているといえる。構築主義的前提を受け入れるのであれば、ある地域を研究対象とするにあたり、その地域に関するイメージが形成されていく過程に目を向けることが必須となるからである。

同時に、多くの研究がテキストとコンテキストとを互いに参照することを義務とする文学・文化研究の分野において、作品外のコンテキストに関する研究の充実が持つ意義は論を待たない。従って、本講座において両者の関係の深化が目指されていることは大いに歓迎すべきであり、評者もこの方針を支持する。

2. 疑問点

一方、文学・文化研究が「スラブ・ユーラシア学」研究という枠組みの中に取り入れられることに関連して、若干気になった点もある。

先述したように本講座は文学・文化研究の成果を意欲的に取り入れている。ちょうど東南アジア研究においては生態学が一つの大きな柱となっていたように、従来スラブ・ユーラシア学においては文学論が大きな役割を担っていたことがここで指摘される。

確かに、ロシアの例を念頭に置けばこのことは納得し易い。ロシアの歴史や社会を論じる上で、文学が常に大きな役割を担ってきたのは事実である。ただ、こうした「地域研究における文学の重要性」が、本講座で問題にされているスラブ・ユーラシア地域全体を視野に入れた場合にどこまで有効なのかという点については、明確に示されていない。ここには、東欧地域やダゲスタンの作家を扱った論文（第2巻沼野論文、第3巻中村論文）や、グルジア詩人オルベリアニの残した歴史書への言及を含む論文（第1巻前田論文）が収録されているものの、他の地域をも含めた「スラブ・ユーラシア」地域を研究する上で、文学といったファクターがどれほど重要なのかという点は、本講座に収められた論稿を読む限りではよく見えてこない。

オリエンタリズム論の視点からロシアの文学作品を考察する研究は、近年日本でもたびたび見かけるようになってきているが、「地域認識」をテーマにした巻もありながら、そのように正面切って「ロシア・オリエンタリズム」批判を取り扱った論稿を収録していないところにも本講座の特色があるといえる。第2巻の序文ではロシア・オリエンタリズム論をめぐるコンテキストの複雑さについて明快に整理されており、こうした点からは、従来のロシア・オリエンタリズム論の限界を克服していこうという本講座のコンセプトの一つをうかがい知ることができる。

ただこの点も、個々の収録論文から伝わってくるかというと、やや疑問が残る。合わせて気になったのが、文学・芸術の領域が、ロシア（ロシア的教育を受けた者）や東欧の占有物であるかのような印象を受けるという点である。いわゆる「ハイ・カルチャー」という概念

も大いに権力性を孕むことは言うまでもないが、一方で「非ヨーロッパ」とされてきた地域が育んだ「ハイ・カルチャー」に目が向けられないことは、この地域を専らロシアなどによってまざされる側に留め置いてしまう。これだけでは、結局のところより大きな権力関係、即ち「ヨーロッパ・非ヨーロッパ」という二項対立を強化してしまうのではないか。一方、言語の深い習得が決定的な意味を持つ文学研究においては、一人の研究者が多くの地域に携わることが極めて難しいため、将来的には共同研究によってこうした領域をカバーしていく必要があるだろう。

さて、イメージの問題は文学的想像力と密接に関わっているため、本講座のテーマの一つとして空間表象の問題が挙げられていることは歓迎すべきことである。実際、この講座では画期的な成果を上げた論文が多数収められており、第3巻第2部に収録された諸論文のみならず、第2巻に収められた福岡論文や塚崎論文もこうした視点から読むことが可能である。

ところで、地域的アイデンティティが形成されるにあたっては地理的条件のみならず、過去の歴史に関する記憶も重要な役割を果たすことが多い。即ち、イメージの問題を考える際には空間軸のみならず時間軸の働きも考慮に入れるべきなのだが、これを実践しているのが第3巻の越野論文である。ここでは、歴史改変小説を読み解くにあたっては「心象の地理学」および「心象の歴史学」が重要な方法論となるという指摘がなされており、文化とアイデンティティとの関係を考える上で貴重な知見を提供している。

さらに一つ、文学・文化研究に関わるやや特殊な事情について指摘しておきたい。

社会科学の諸分野や歴史学などと、文学・文化研究とを比べた場合に顕著なのが、ロシアやユーラシアといった地理的枠組み、あるいは「場所」というファクターに対する意識の度合いが異なっているという点である。ロシア文学を専攻する研究者が自分の研究対象を「ロシア」という地理的枠組みと結びつけることは、個々の研究において意識的に選択される事項であって必ずしも義務ではない。やや乱暴な言い方をすれば、ロシア史やロシア政治の専門家に比べて、ロシア文学者はそこまでロシアのことを考えていない、あるいは考えないという選択肢が許されている。

むろん、実際に今行われている文学研究の多くは、テキストとコンテクストとを互いに参照し合うという形式を取っている。とはいえ、後者にそれだけ関心を割くか、その中で国家や民族といった規模の共同体をどこまで射程に入れるかといった選択は、あくまでその個々の研究者に委ねられる。創作手法や文芸理論、あるいは文学作品に込められた哲学や倫理などといった抽象性の高いテーマを扱う場合、その比重は小さくなる。

もちろん、本講座にも多くの文学・文化研究者が参加して目覚ましい成果を上げており、地域研究に積極的にコミットできる研究が数多く存在することは言うまでもない。ただ同時に、文学・文化研究者が手持ちの材料を出していくだけでは、そういった数々の新しい枠組み作りには限界があるかも知れないと思ったのも事実である。例えば「中域圏」の概念を文学・文化史的にどう裏付けて行くのかといったことはおそらく今後の課題となるであろうし、文学・文化研究者の側がより積極的に地域というファクターを意識することも求められるであろう。

こうしたことを考えると、文学・文化研究と地域研究との関わりについて、一歩引いてメ

タレベルで問題にする試みが行われてもいいのではないだろうか。研究者の問題関心や研究対象そのものというレベルに関して言えば、狭い意味での研究分野の壁を超えることは既に当たり前になっていると言っているが、研究者の「エートス」という点では伝統的な研究分野によって築かれた厚い壁が依然として残っており、しかもこちらは意識されることが格段に少ない。文学研究と歴史研究だけを取ってみても、ディシプリンの違い、用語の定義や時代区分に対する意識の差、語学習得に対する姿勢の違いなどから、同じ問題を扱っていてもこれまで様々な局面でずれが生じていた。今後、「スラブ・ユーラシア学」という枠組みの中で各分野の研究者が共同研究を続けて行く上でも、こうした問題を一度正面から総括しておくことは、決して無意味でないと思われる。

3. 各巻の構成

各巻の構成について全体的な印象を言えば、個々の論文の内容は刺激的であっても、それらの構成、配置の必然性が分かりにくい個所が多い。また、各巻のコンセプトが序文で明快に示されているのに対し、それぞれの論文が必ずしもそうした全体のコンセプトや問題提起にはっきり応答しているわけではないという点も、全体の構成を分かりにくくしている。

文学・文化に関連する箇所在具体例を挙げると、まず気になったのが、第3巻第3～5章に収められた中村論文、望月論文、越野論文の位置づけである。この内容は、地域表象という点で第2巻の内容と重なるものを持っているように思われるが、両者の違いはどこにあるのか。そもそも「地域認識」と「心象地理」というコンセプト自体もかなり重なり合う部分があり、両者の差がどのように位置づけられているのかという点も、やや曖昧であるという印象を持った。

第2巻第2章に収められた福間論文も、ロシアという地域を扱い、「風景は社会・国民にとって内部の不平等を想起させずに共有できる」という指摘がなされている以上、第3巻の内容との親和性も強いと考えられる。これを第2巻に配する上で決め手となった点はどこにあるのか。

また、第3巻で空間表象と帝国論とを結びつける必然性は、跨境史と帝国論とのつながりに比べて分かりにくく、研究史的な事情に通じていない一般読者も念頭に置いている以上、もう少しフォローがあっても良かったのではないかと考えられる。

4. 研究成果の発信のあり方について

本講座の目的、即ち様々な分野の最先端の研究を紹介するという目的は、十分に達成されていると考える。

しかしこのことが同時に、各分野間の敷居を高くもしているという点も否定できない。初学者・一般読者のみならず、本講座の構成は、専門分野を異にする研究者にとっても決してわかりやすいものにはなっていないのではないだろうか。研究において、「跨境」ということ、ボーダーレスな発想が必要であるということは、既に当然すぎる事実だが、こうした方向性に従って研究を推し進める上でも、後続の研究者が委縮しない、段階を踏んでそういった研究の重要性を認識していくことを可能にするような態勢が必要だと思われる。境界を跨ぐこ

とが必要以上に困難に見えてしまうことは、既に跨いでしまった研究者の業績の価値を高めこそすれ、将来の研究にとってプラスとは思われない。従って、最先端の研究を行う一方で、研究成果を幅広い読者にアピールするための何らかの手段が必要と思われる。

また、これとも関係するが、近年は国際的な研究交流が盛んになるとともに通信技術も発達し、旧ソ連をはじめとするスラブ・ユーラシア地域の研究者が英語などによる外国の研究に触れることや、日本など外国の研究者が当該地域の研究や一次資料に触れることが、以前に比べて格段に容易になった。そんな今であるからこそ、専門性の高い研究成果をあえて日本語で発表する意味について一層の積極的なアピールがあってもよかったのではないだろうか。

研究のディシプリンを超えること、狭い意味での研究分野を超えることの重要性は、評者が研究の世界に入った10年ほど前から既に言われている。今回の「スラブ・ユーラシア学」研究は、「跨境」のもたらした成果を個々の研究分野に回収するのみならず、帝国や中域圏、地域認識など汎用性の高いテーマを前面に打ち出すことでさらに外に向けて開かれようとする方向性という点において画期的である。文学・文化研究による貢献という点も含め、今後の共同研究の展開に期待したい。

* * * * *

応答(1) 家田 修

以下、論点を4つに整理して、評者に対する答えとしたい。

1. 講座の全体的構成について

『講座 スラブ・ユーラシア学』全三巻が第一に目指した課題は、「ソ連東欧研究」ないし「旧ソ連東欧地域」という従来の研究の枠組みに代わる新しい土俵として、「スラブ・ユーラシア」という地域名称、そして「スラブ・ユーラシア学」の方法論を提示することであった。今回の三氏による書評、さらに『ロシア史研究』に掲載された塩川伸明による書評においても、『講座』の基本的な問題提起が肯定的に受けとめられたことは、今後の日本におけるスラブ・ユーラシア研究を考えるうえで、画期的なことである。

スラブ研究センターは今回の『講座 スラブ・ユーラシア学』刊行に先行して、世界に向けた欧文叢書として20巻ほどのSlavic Eurasian Studiesを刊行した。また同センターは欧米の学会でも日本発の提案として「スラブ・ユーラシア学」を提唱してきた。10年後あるいは20年後、国内外で「スラブ・ユーラシア」が旧ソ連東欧地域を指す呼称として定着しているとすれば、まさに「スラブ・ユーラシア学の挑戦」(合評会での西山発言)は所期の目的を果たしたことになる。また、「(国際的な研究交流が盛んな今日において)専門性の高い研究成果をあえて日本語で発表する意味について一層の積極的なアピールがあってもよかつ

たのではないだろうか」という鳥山の指摘に対しても、以上の点を確認することで、回答としたい。

以下では、まず本講座の全体構成に係わる問題を取り上げる。第一の点は地域概念の構築性についてである。本講座では地域という空間が自明の前提として存在しているのではなく、他者との関係の中で形成され、時間とともに変化するという「地域概念の構築性」を前面に押し出した。これに対して塩川は「すぐれた地域研究はもとからそうした視点をもっていた」と指摘するが、日本における地域研究をこれまで牽引してきた矢野暢編『現代の地域研究』（全四巻、弘文堂、1993-1994年）に集約される東南アジア研究は、地域を生態系に基づく実体としてとらえ、これを「世界単位」と呼んだ。『講座 スラブ・ユーラシア学』の編集にあたってはこうした先行研究を念頭に置き、地域概念の構築性を明瞭に打ち出す必要があった。もちろん今日の東南アジア研究者は生態論だけを基礎にして研究を行っているわけではない。しかし地域の全体像を構築主義によって体系的に論ずることは、いまだ緒に就いたばかりである。現代中国研究を代表する毛里和子は機会あるごとに、「地域はつくられる」ことを強調しており、東アジア研究においても構築主義的に地域を考えることが今日の課題となっている。本講座はこうした研究状況のなかで、スラブ・ユーラシア地域を素材としながら、地域研究一般における方法論を論じる試みである。

第二の争点は『講座 スラブ・ユーラシア学』の三巻構成（中域圏、地域認識、帝国）が、それ自体として地域研究の方法論を提示していることに係わる問題である。この点について鳥山は、「帝国や中域圏、地域認識など汎用性の高いテーマを前面に打ち出すことでさらに外に向けて開かれようとする方向性という点において画期的である」とし、また久保も「『講座』全体の問題提起や方法論上の提言を支持する」として、本講座の方法論に積極的な支持を表明している。これに対して西山は、「この『講座』が「中域圏」というキー概念を駆使し個々の地域をとりあげ、地域研究と地域認識へ研究の地平を大きく広げたことは疑いない」が、他方で「「中心」なき「周縁」の「中域圏」論との感を呈している」と述べ、帝国論の不備を指摘している。久保も「本講座は、全体としてスラブ・ユーラシア地域の周縁あるいは境界地域に偏りすぎではないかという印象が残った」と指摘し、塩川も「「ロシア・プロパー」を扱ったものが少ない点は、多少気になる。・・・かつてのロシア史／ソ連史研究があまりにもモスクワ中心—あるいは時期によってはペテルブルグ中心—だった」にせよ、「中樞」についても新たな眼で再検討する必要性は高い」と述べている。

確かに本講座では帝国の中樞に的を絞った分析は限られている。この点を含めて、本講座での帝国論の論述の仕方について、第3巻の編集責任者である松里から反論があると思うが、ここでは全体の構成という観点から次のことを確認しておきたい。つまり「中樞」ないしモスクワ／クレムリンについての分析が不十分であるという批判をそのまま受け入れたとしても、『講座』としては帝国論に三巻構成のうちの一巻を当てており、スラブ・ユーラシア学の方法論を示すという講座の目的から見れば、過不足はないのではないかと考える。またいずれの評者からも中域圏・地域認識・帝国論という枠組みを「スラブ・ユーラシア学」の骨子とすることへの、本質的な疑義は表明されなかった。この点も確認しておきたい。

一般に講座ものにおける巻別構成は、それ自体が学問の方法論を積極的にせよ、消極的に

せよ表現している。この意味で本講座の特色を明瞭にするため、他の地域研究シリーズと比較してみたい。スラブ・ユーラシアに関しては10年ほど前に『講座 スラブの世界』（全八巻、弘文堂、1994–1996年）が刊行されたが、このシリーズは「文学」、「政治」、「経済」、「歴史」など学問分野別に構成された。旧講座では、方法論に関して所収論文による個別的な問題提起はなされたものの、全体として地域研究の方法論を積極的に提示することは目指されなかった。むしろ戦後日本の「第二期（1970–1980年代）の研究のとりまとめ」（塩川）であり、巻別構成はそれまで主流だった学問分野別の研究体制を反映するものだった。

これに対して『現代南アジア』（全六巻、東京大学出版会、2002–2003年）や『イスラーム地域研究叢書』（全八巻、東京大学出版会、2003–2005年）は学際的な地域研究が活発化する中で刊行され、巻別構成も現実的な問題群を柱とするものに変化した。前者のシリーズでは「経済自由化のゆくえ」、「民主主義へのとりくみ」、「開発と環境」、「社会・文化・ジェンダー」、「世界システムとネットワーク」が各巻の表題として並び、後者では「思想と政治運動」、「民衆運動と民主化」、「所有・契約・市場・公正」、「国家とナショナリズム」、「性と文化」、「神秘主義と聖者信仰」、「記録と表象」が切り口とされた。

先に触れた矢野暢編『現代の地域研究』では「手法」、「世界単位」、「フロンティア」、「発展の論理」が各巻のタイトルであり、地域研究の方法論が巻別構成の柱になっているようにみえる。確かにこのシリーズは方法論を意識した地域研究講座の嚆矢であるが、巻の構成によって方法論の体系化が行われたわけではなかった。これに対し、東アジアを扱った『東アジア共同体の構築』（全四巻、岩波書店、2006–2007年）は「新たな地域形成」、「経済共同体への展望」、「国際移動と社会変容」、「ネットワーク解析」という構成になっており、地域として東アジアをどう分析するのかという方法的な問いかけが明瞭に巻別編成の中に示されている。また第4巻のネットワーク解析が示しているように、このシリーズでは数量化できる具体的なデータの積み重ねによるネットワーク分析を地域形成論の基礎にすえている。

ここではこれ以上立ち入って他地域との比較を論ずる余裕はないが、『講座 スラブ・ユーラシア学』の方法論的特色は上記のさまざまな地域研究講座のありかたと対比することで、明確になったと考える。

2. 帝国論と周縁研究

西山と久保は本講座の帝国論が境界地域に偏っている、あるいは中心なき周縁論ではないかと指摘している。いわばロシア論が弱いという批判である。以下、この点について方法論を中心に私見を述べたい。まず考えなければならないのは、ロシア論とは何かである。ロシアの中枢を論じるということは、具体的に何を論ずることで達成されるのだろうか。クレムリンにおける意思決定過程、あるいは政治エリート、とりわけ皇帝、共産党幹部、大統領などの指導者論が想定されているのであろうか。あるいは議会（ドゥーマ）や政党の分析であろうか。もちろんロシアを比較政治学の立場から分析するのであれば、こうしたクレムリン論が中心になっても首肯できる。

しかし地域という視点からロシアないしロシア帝国を論ずるのであれば、分析の仕方はお

のずと違ってくる。例えば、第2巻の編者宇山はロシア帝国の特徴を論じた別稿⁽⁴⁾で、ロシアと被征服者の間にかなり大きな「バーゲニングの余地」があったことを指摘している。つまり帝国ロシアは周縁をロシア化することで生まれたのではなく、異質なものを異質なものと包摂した結果、「多法域」のロシアが生まれたのである。とすれば帝国としてのロシアがもっとも明瞭に分析できるのは帝国の中心ではなく、境界地域（周縁）である。第3巻で望月論文が指摘する「空虚なロシア」というのは、まさにドーナツ的なロシア空間の文学的表現ではないだろうか。西山は「周縁研究が、翻って「中心」研究を促進・活性化させ、中心＝周縁の総体的関係の新たな認識、つまり「帝国」研究へと進展することを期待している」と述べるが、周縁研究はそのまま中心の研究でもあるという表裏の関係として中心と周縁の関係は理解しうるのではないか。この「中心一周縁」理解に立ったうえで、モスクワやクレムリンがどう見えてくるのか、この問題領域について本講座が十分に答えていないのは、確かにその通りだが、それがそのまま帝国としてのロシア論が本講座で十分に展開されていないという批判にはならないと考える。

帝国論に関連して久保から、帝国論とメガ地域論はどう違うのか、「歴史研究と現状研究の違いという理解」でよいのか、さらに「中域圏／メガ地域論と帝国論の関係」はどうなっているのかという質問がなされた。中域圏とメガ地域の関係については大まかではあるが、拙稿⁽⁵⁾で論じたことがある。中域圏とメガ地域の関係は動的であり、時間とともに変化する。中域圏はメガ地域の部分として生まれるが、時間の経過とともに独自性を強め、メガ地域から自立することもある。自立した中域圏（こうなればもはや中域圏ではなく独自の地域と言うべきだが）はさらに拡大して自らが属していたメガ地域を呑み込むほどに発展することもある。その場合、かつての中域圏とメガ地域との関係は逆転する。モスクワ大公国からロシア帝国に至るロシアの歴史はこうした中域圏の変遷を典型的に示す例ではないだろうか。つまり中域圏とメガ地域の適用可能性は歴史分析、あるいは現状分析のいずれかに限られるものではない。また帝国論とメガ地域論のあいだにも、歴史分析と現状分析という分業はない。

メガ地域と帝国との概念的関係については、前者が後者を含むと言える。つまりメガ地域も帝国も、理念型としては、いずれも均質な空間ではないという点で共通しているが（この点で中域圏は理念型として内部的な均質性を想定している）、メガ地域は帝国のように領域主権的な統合性を必ずしも有している必要はなく、下位地域が緩やかに束ねられていけばよい。現在のスラブ・ユーラシアは明らかに帝国ではないが、ソ連時代やロシア帝政期に形成されたつながりがすべて消滅したわけでもない。その意味でスラブ・ユーラシアを一つの地域として論ずる意味もあれば、必要性もある。メガ地域を緩やかな広域統合として定義するならば、いま東アジアで問題となっている東アジア共同体もメガ地域である。ただし東アジア

4 宇山智彦「帝国の弱さ：ユーラシア近現代史から見る国家論と世界秩序」家田修編『スラブ・ユーラシア学の幕開け（21世紀COE総括シンポジウム報告集）』近刊、所収。

5 IEDA Osamu, "Regional Identities and Meso-Mega Area Dynamics in Slavic Eurasia: Focused on Eastern Europe," in MATSUZATO Kimitaka, ed., *Emerging Meso-Areas in the Former Socialist Countries: History Revived or Improvised?* Slavic Eurasian Studies, no. 7 (Sapporo: Slavic Research Center, 2005).

共同体はスラブ・ユーラシアとは反対に、形成過程にあるメガ地域である。EUも周辺の影響圏を含めて考えるなら、帝国であり、かつメガ地域でもある。イスラーム地域も地中海から東南アジアにまたがる巨大なメガ地域であり、その中に多様な数多くの中域圏を設定することができる。つまりメガ地域という結合形態は帝国へ至る過程としても、あるいは帝国の崩壊過程としても、あるいは帝国に至らない地域統合としても想定可能であり、中域圏—メガ地域という概念構成は、幅広くかつ体系的に地域の変容を理解する道具となりうる。

3. 中域圏

中域圏の設定の仕方について久保から、「研究者は、どのような条件のもとである空間を「中域圏」と見なすことができるのか。本講座第1巻は、じつはこの最も根本的な問題にあまりはっきりと答えていない。・・・この問いが等閑視されてしまうならば、ある「地域」あるいは「空間」を対象として設定すること自体により意識的・自覚的・戦略的であるべきとする本講座の趣旨は薄れてしまうのではないかと考える」という批判が出された。これに対する答えは、久保自身が「各研究者に独自に、そして自由に「中域圏」を設定する余地を残すためにも、あまり限定的な定義・操作化は実際的ではない」と述べている通りであるが、より明確にこの疑問に答えるには、例えば、「東欧はいつ中欧になったのか」という問いを立ててみるのがよいかもしい。この場合、東欧はソ連東欧社会主義圏の一部としての地域であり、中欧はそこから自らを区別しようとする中域圏である。この問いにおける東欧と中欧という地域認識のずれを「内的」、「外的」そして「制度的」な地域形成力によって分析するのが中域圏論である。つまりある地域に関する認識の変化が中域圏論の出発点である。その認識の変化は研究者自身から始まる場合もある。それゆえに研究者は自分の問題関心に自覚的でなければならないと考える。

4. 文化文学論の役割

本講座は文学文化論をスラブ・ユーラシア学の柱の一つとするという主張を打ち出したが、鳥山はこの試みを積極的に支持し、さらにはこの試みを深めるための重要な建設的意見も提示している。その上で鳥山は今後の課題として、「文学・文化研究と地域研究との関わりについて、一步引いてメタレベルで問題にする試みが行われてもいいのではないだろうか」と提言する。この提案も非常に重要である。编者としては、この試みはすでに本講座の第1巻で始まっていると答えたい。すなわち三谷論文が言語学的手法で事実上のメタ分析を行い、鳥山の提案に通じる成果を挙げているのである。また三谷論文の方法に従って、例えば本講座の全体を「ロシア」、「ロシアの」、「ロシアに」などのキーワードでコンテキスト分析してみると、メタレベルのロシア研究につながる。

本講座に所収された論文は三谷論文のように、方法論の提示という意味も併せ持っている。わずかに三巻の中にすべての研究対象を網羅的に取り込むことはできない。したがって、各執筆者には研究の方法論、切り口の明快な提示をお願いした。明示的に方法論が敷衍されている論文は少ないが、多くの論文が方法論を意識して書かれている。本講座は「研究書」ではなく、スラブ・ユーラシア研究を志す人々にとって応用可能な道具だてを体系的に与える「学」を意図している。

鳥山は巻ごとの編成の問題としても文学文化論を取り上げ、相互に関連性の高い文学文化論文が一つの巻にまとめられず、三巻のあちこちに分散させられていることに不満を表明している。確かに分析の素材に即して講座を組み立てるなら、鳥山提案のほうがわかりやすい。しかし本講座では中域圏、地域認識、帝国論による巻別構成を採用したため、ジャンルによるまとまりは犠牲にせざるを得なかった。

最後になるが、各巻の序文と各論との関係について一言述べたい。この点について久保は「個々の論文を意味づける作業は各巻序文において見事に行われている」、しかし「個々の事例分析をもとに方法論・理論の発展を目指す意思はあまり感じられなかった」と批判している。鳥山もほぼ同様の指摘を行っている。第1巻について言えば、確かに、実証と方法論の循環的な検証が十分になされたとはいいがたい。その点は批判されたとおりである。しかし、意思がなかったからではない。むしろ本講座の刊行によって幅広い読者から方法論や各論文への批評がなされ、そこから実証と理論の本格的な循環的検証が始まると期待した。本講座は旧講座と異なり、終着点ではなく、問題提起の種まきが目的だった。この意味で今回の書評諸氏と編集者の対話は発芽であり、これから芽を育てていく上で貴重な第一歩だった。改めて、三巻にわたる本講座の書評を引き受け、有意義な批評と意見を提示してくださった三氏に心よりお礼を申し上げる。

応答 (2) 宇山 智彦

スラブ・ユーラシア研究は危機にあるのではないかと時々思うことがある。EU 拡大などにより「ヨーロッパ化」が進む旧東欧・バルト諸国と、欧米的な物差しが通用しない CIS 諸国をまとめて語るができない現状。旧ソ連・東欧地域に対する日本社会の関心の低下。大学をめぐる厳しい状況の中で、特に地域研究の若手にとって深刻な問題になっている就職難。こうした情勢の中でスラブ研究センターが発信した研究成果の一つが『講座 スラブ・ユーラシア学』であり、その合評会に「スラブ・ユーラシア研究の将来を考える」といういささか大上段に振りかぶったタイトルをつけたのも、スラブ・ユーラシア研究全般やスラブ研究センターの活動のあり方についてこの機会に考えたいという意識からだった。幸い、3人の評者の方々から極めて有益なコメントをいただけたので、それに答える形で私見を述べることにしたい。

1. 比較研究と理論化の可能性

私が研究を始めた約20年前、ロシア・ソ連研究の状況を見て感じたことの一つは、この分野には重厚な研究が多い反面、文系学問全般の潮流や理論との接点が乏しいのではないかとことだった。この状況は近年大いに改善されたため、第2巻ではその成果に基づき、構築主義、他者論、ネイション論、言説分析、表象論などを直接間接に意識した論考をさまざまな学問分野から集めた（第2巻の索引を見れば、どのようなキーワードがよく使われているのか分かつと思う）。異文化接触やネットワークへの着目も多くの論文に共通している。

久保が第2巻を、国際的な理論状況における位置づけが明確で、学問分野の境界線の打破に成功していると評してくれたのは、狙い通りであり大変嬉しい。

久保は同時に、講座全体を通して、事例分析を意識的に方法論的・理論的な発展につなげようとする論考が少ないと批判している。確かに、方法論を意識しつつ事例分析を行うのがスラブ・ユーラシア研究の現段階であり、そこから新たな理論的発展を成し遂げるのは今後の課題である。もっとも、地域研究は基本的にある地域に対する理解の精度を高めることを課題とする学問であり、そのために理論研究とのインタラクションを行うことは必要でも、新奇な理論を発明することに励むのは生産的ではないとも言える。また、既存の理論をそのまま当てはめて体系的な比較をしようとしても無理が生じる場合が多い。

むしろ有望なのは、ベラルーシに関する服部論文（第3巻）をヒントに久保が、「境界線の度重なる移動が跨境地域の人々のアイデンティティ、制度などに与えた影響についての比較研究」を提案したように、ある地域に関する研究から生まれた視座を別の地域にも当てはめることによって、地域間の共通性や相違をあぶり出すという、ゆるやかな手法での比較研究だろう。2008年末にスラブ研究センターの研究者を中心に発足した新学術領域研究「ユーラシア地域大国の比較研究」は、ロシア、中国、インドその他の地域の研究から得られる知見を交換することによる比較研究をめざすものであり、本講座の評者の方々の方々の指摘もそこに生かすことができると考える。

2. チームワークの向上の必要性

講座各巻の序論と各論の間にトップ・ダウンの関係はあるがボトム・アップがない、という久保の指摘は大変耳が痛い。これは論集の編集につきものの問題ではあるが、特に今回は、講座を編集するにあたり執筆者を集めた会合を持つ機会が乏しかった（これは、私が岩崎一郎、小松久男と共に『現代中央アジア論』[日本評論社、2004年]を編集した際に、全執筆者が互いの原稿に講評を書き合い、徹底的に議論したのとは全く異なる状況であった）。最近の研究潮流の中で問題意識を共有している執筆陣を集め、メールで随時意思疎通を図ったものの、双方向・多方向の意見交換が十分にはできなかつたという事情が、久保の慧眼に見抜かれてしまったようである。また、近年のスラブ研究センターの活動スタイルとしても、大きなプロジェクトを発案して旗を振ることに手一杯で、フィードバックを集めて研究の展開に生かす余裕はあまりなかつた。研究者が忙しすぎるという根本的な問題があり、言うは易く行うは難しではあるが、今後の研究においてはチームワークをいっそう重視する必要があるだろう。

巻ごとのすみ分けも編集の際に苦勞した問題であり、構成・配置の必然性が分かりにくい、特に文学・文化に関連する部分で第2巻と第3巻の差が曖昧であるという鳥山の感想は自然である。実は同様のことは歴史についても言え、第2巻の半分以上を占める歴史関係の章は、第3巻がテーマとする帝国論に多かれ少なかれ関係しているのである。基本的にはこの重複は、地域認識論と帝国論が、歴史研究と文学・文化研究などにまたがる学際研究に適したアプローチであること、そして近年の研究状況の中で両者が緊密に関連しながら展開していることに由来するが、共通性と違いをより明解に示す必要は確かにあつただろう。ただ結果的

には、各巻のカラーはそれなりに明瞭に出せたのではないかと思うが、どうだろうか。第2巻について言えば、前述のような理論潮流との接合のほか、ロシア・東欧研究と東洋史・アジア研究の連携⁶⁾、多言語資料の使用、地域認識を形作るまなごしの権力性への着目などを特色とさせたつもりである。

3. 「周縁」と「跨境」：誤解を解くために

久保は「本講座は、全体としてスラブ・ユーラシア地域の周縁あるいは境界地域に偏りすぎではないか」、西山は「中心・周縁という基本的とも思える視点が後景に退いて」おり、「中心 core」を担い体現した「秩序」が何であるか分析し示す努力が希薄⁷⁾であると述べるが、ここには若干の誤解があると思う。

過去十数年のロシア帝国史研究が明らかにしたのは、旧来型の中心・周縁論の限界である。かつての研究は、西部諸国もベッサラビアもヴォルガ・ウラルも、カフカースもトルキスタンも、みな「周縁」として扱い、帝国内でのそれら地域の位置づけの違いは十分に認識されていなかった。しかし近年の研究は、ロシア帝国が地域別・民族別・宗教別にいかに多様な統治戦略を展開し、現地社会といかに多様な関係を結んでいたかを解明した（現地社会との相互関係についてはたとえば第2巻長縄論文）。こうした多様性こそが、西山の言う「中心」が体現した秩序⁸⁾の特徴であり、このことは非ロシア人地域の本格的な研究によって初めて鮮明に浮かび上がったのである。

この多様性は、大まかにはそれぞれの地域の社会構造、文化、歴史的背景に対応しており、中心・周縁論ではなく文化相対主義的な視点から説明できる（特に前近代を含めて地域史を長期的に眺めれば、ロシアが中心でその他は周縁だというのは全く違う姿が見えてくる。たとえば第2巻木村論文参照）。しかし政策決定過程に注目するならば、単に多様な状況から多様な統治方法が自然に生じたのではなく、むしろそれぞれの民族集団が「狂信性」「戦闘性」といった固有の性格を持つというステレオタイプ、オリエンタリズム的な言説、総督・知事らの個性などに由来する部分が大きいことが分かる⁹⁾。こうした統治者側の観念や事情が被統治者に対して振るう権力に注目する点では、非ロシア人地域の研究は中心・周縁論的な権力論を引き継ぎ深化させていると言える。

そもそも、全体的に低開発だったロシア帝国において、首都に近い地域・住民が即「中心」だったわけではない。かつて盛んだったロシア農民や労働者の研究も、社会の「周縁」の研究という意味では非ロシア人地域の研究に通じるものである。後者の成果をロシア人地域の研究と組み合わせてロシア帝国史像を構築すべきだという趣旨で解釈するなら、「総体的関係の新たな認識」を求める西山の示唆に私は賛成である。

ついでに言えば、周知の通り世界システム論ではロシアそのものが「半周縁」であり、中心は何と言っても西欧である。西欧文明と帝国権力の二重の力というモチーフはロシア・ソ

6 本来、この講座の批評は東洋史研究者にもお願いすべきところだったが、合評会をロシア・東欧関係諸学会の開かれる機会に合わせて設定したため、今回はロシア・東欧研究者のみから批評をいただいた。今後、東洋史研究者からも批評を伺えれば幸いである。

7 宇山智彦『『個別主義の帝国』ロシアの中央アジア政策：正教化と兵役の問題を中心に』『スラヴ研究』53号、2006年、27-59頁。

連とその近隣地域の歴史に通底するものであり、この視点から旧ソ連地域と東欧地域を比較できるのではないかというのが第2巻の隠れた問題意識である。特にロシアと西欧にはさまれた中東欧やバルトで、人々がこの二重の力に対して取った態度を活写する第2巻沼野論文・小森論文は、中心・周縁論の見直しに有用であろう。

また、今回の評者の批評がそうだというわけではないが、「周縁」研究への批判にはしばしば、「周縁研究が流行しなければロシア中央の研究がもっと盛んになったはずだ」という認識が伴っているように思われる。この認識は実情に合わない。たとえば中央ユーラシア研究では、日本における研究の主力は、ロシア研究の学科出身であっても当初から非ロシア地域の研究を志向していた人々と、東洋史や文化人類学の出身者であり、ロシア研究から「流れた」わけではない。これらの人々が現れなければ、旧ソ連地域の研究はもっと停滞していただろうし、一般社会においても、非ロシア地域への関心が、ロシアへの関心の低下をある程度埋め合わせてきた。「ロシア＝中心」という固定観念でロシア研究への「回帰」を唱えるのではなく、多様な出自の研究者がさまざまな地域の研究をすることが旧ソ連地域の研究を活性化させているという認識のもと、協力関係を緊密にしていくのが生産的だと思われる。

次に、「跨境」の問題に移りたい。本講座は、一国・一地域の枠に閉じこもらない論考を多く収録し、複数の地域に目を配ることによって地域研究を豊かにできることを示した。これに「跨境」という見慣れない言葉をかぶせたことは、このアプローチを目立たせた一方、「境界を跨ぐことが必要以上に困難に見えてしまう」（鳥山）という危惧を生んでいるようである。ここで確認しておきたいのは、鳥山自身「ボーダーレスな発想が必要であるということは、既に当然すぎる」と述べる通り、跨境的アプローチ自体それほど特殊な、人を「萎縮」させるようなことではないということである。境界を越える現象があれば境界にこだわらずに研究するのは地域研究の基本であるし、第2巻序章にも書いたように中央ユーラシア研究ではむしろ跨境的なテーマの方が古典的である（そのためこの巻では、実質的に跨境的アプローチをとりながら、跨境という言葉を使って新しさを強調することを避けた）。

また、境界を越える研究が有効なのは、境界を越える現象があるから、あるいは研究者の視野を広げる効果があるからであって、跨境的研究が自己目的ないし至上命令であるわけではない。国境をはじめとする境界による区切りが人々の生活を大きく規定する以上、境界の内側の研究をすることの重要性は消えない。スラブ・ユーラシアの中にはまだまだ研究が手薄な、そこに特化した研究が必要な地域も多い。それぞれの地域に関する基礎知識がないまま「跨境」するのはむしろ危険である。

そのうえで指摘しておきたいのは、境界を越えることや他言語を学ぶことに対する意欲ないし拒否反応は、かなりの部分、学問分野の慣習・ハビトゥスに左右されるということである。たとえばロシア研究ではロシア語・英語以外の外国語を習得するのはとてつもないことのように思われがちだが、東洋史（特に内陸アジア・西アジア史）では多くの言語を学ぶのは当たり前のことである。このような考え方の違いを知り、学び合うことで、境界を越えることへの恐れをなくし、豊かな共同研究ができるのではないか。

4. 諸分野の均衡ある発展をめざして

本講座はディシプリンのにもさまざまな分野にまたがっているが、それらの間の関係が必ずしも明示的に表現できていないという印象があるようだ。久保は松里に対して、「帝国」概念が現状分析概念として有効だということを示すに至っていないとコメントしている。私の帝国論は松里とやや異なるが、帝国概念の汎用性について簡単に私見を述べたい。別稿⁽⁸⁾で論じたように帝国は、影響力を行使したいと考える空間が現に綿密に統治できている空間より大きく、情報の不完全性が伴うという特徴を持つ。そのため、帝国の政策は広い範囲にインパクトを及ぼしうると同時に失敗しやすいが、支配下の社会や小国にとっては、帝国権力との間に相互不信が生まれがちな反面、帝国の建前を尊重するのと引き換えに利益を引き出すバーゲニングの余地も生まれることになる。この視座は、歴史上の帝国にも、ブッシュ時代のアメリカや、プーチン以降のロシアにも適用できると考えるが、今後の比較帝国研究の中でさらに彫琢していきたいと思う。

評者が明確に述べているわけではないが、そもそも歴史を扱った章が多いことも本講座の構成上目立つ点だろう。歴史研究の比重の高さは日本の地域研究、特に旧ソ連地域研究の特徴であり、研究に深みを与えているが、反面、研究者が地域の現状に関する認識を一般社会に広めたり、国際的な研究コミュニティに発信したりする機能を十分に果たせていないということにもつながる。大学院生の進路の多様化という観点からも、政治・社会・経済の現状に関する研究・教育に力を入れ、修了後にジャーナリズムや外交・国際協力などの分野で働くことを奨励するのは有益だろう。

なお、歴史研究の中でも本講座で論じたのはロシア帝国期が中心で、ソ連時代が少ないというのは塩川が『ロシア史研究』の書評で批判する通りである。日本での研究の重厚な蓄積と、近年の欧米での研究成果（ここでも、非ロシア人地域の研究から得られたものが多い）を合わせて、ソ連史研究を再活性化させることは急務である。また、前近代史の研究をどう取り込むかも、スラブ研究センターの長年の課題である。

鳥山が、文学・文化研究者は社会学者・歴史学者ほどロシアという地理的枠組みを意識していないと述べるのは、やや意外な感がある。なぜなら、日本の地域研究（少なくとも、ロシアを含む広義の欧米地域研究）は、特に教育面において外国語学部・教養学部・文学部に支えられ、文学・文化研究者がその中核を担っているからである。政治学者や経済学者と異なり、文学者は一貫して地域（国ないし文化圏・言語圏）に特化した教育を受け、現地に早期に留学することも多い。「地域」の意識の仕方（程度というよりも）が分野によって異なるのであれば、旧ソ連・東欧研究者の数の中で高い比率を占める文学・文化研究者がいつも積極的に自らの地域認識を語り、地域研究をリードしていてもよいのではないだろうか。

これも鳥山の指摘に関わることだが、ロシア・東欧以外の文学・芸術を論じた章が少ないのは、旧ソ連の非ロシア人にハイ・カルチャーがないと考えているからではもちろんなく、

8 宇山「帝国の弱さ」。なお、このような帝国の特徴が他の政体と区別される意味を持つのは、国民国家システムと共存ないし競合しているからこそである。個々の帝国の歴史を考える際にかなり古い時代まで遡る必要があるのは松里の言う通りだが、比較分析のためには、帝国論の時代的枠組みを限定すべきだという西山の意見に賛成である。

専門家が極めて少ないからである。文学・文化研究者は圧倒的にメジャー言語志向であるし、ペルシア語やウルドゥー語のように外国語大学にコースがある言語ならともかく、旧ソ連の非ロシア諸語文学・文化の専門家を体系的に育てる制度は日本に存在しない。これは今後取り組むべき大きな問題だが、当面は非ロシア人地域の歴史研究者などが文学・文化に手を広げる⁹⁾、ロシア文学・文化研究者が非ロシア語・文学に手を広げるといふ二方面作戦をとるしかない。母集団の数からいえば、やはり後者が特に期待されるところである。

以上、さまざまな問題に関する考えを喚起する刺激的な批評をくださった評者陣に改めて感謝申し上げたい。違いを認識し合うことが対話の不可欠な一段階だとすれば、さまざまな書き手・読み手が異なる意見を表明しつつ、スラブ・ユーラシア研究全体の発展のあり方を話し合う機会を作れたことで、本講座の目的の一端は達せられたのではないかと思う。

応答 (3) 松里 公孝

かなりの総分量になる三巻の論文集をこれほど丁寧に読んでいただき、鋭いコメントを頂戴したことは、編集者のひとりとして身に余る名誉である。以下、第3巻の主要なコンセプトである帝国論を中心にリプライしたい。

1. 第3巻の構成、特に帝国論と空間表象論の関係について

第3巻は、ほんらい文化、歴史の2巻として成立するはずだったものを力の節約のため1冊にまとめたものであったが、怪我の功名とでも言うのだろうか、そのために学際性が際立ち、評者のお褒めの言葉を受けることになった。松里と中村が帝国を、服部、麻田、中嶋が跨境民族・跨境地域を、望月、高尾、越野が空間表象を主に論じている。志田は帝国論と跨境論を結合し、21世紀COEの申し子とでもいうべき活躍を見せている。越野は、歴史改変小説という、保守的な文学観からはキワモノとみなされかねない素材を使って、現代ロシアの帝国意識を描出している。この個性的なアプローチは、猥語文学創出の試みを通じてベラルーシ知識人の民族意識を描き出した旧稿¹⁰⁾と通じるものがある。

鳥山からは、帝国論と跨境史の連関はわかるが、帝国論と空間表象論の関係は第3巻からは見えないという指摘がなされた。たしかに、望月と高尾の章は、ロシアやユダヤ人を理解する上で優れた空間表象論であるが、帝国を意識したものとはいえないかもしれない。欧米やロシアでは、マーク・バッシン、アンドレイ・ゾーリン、アナトーリー・レムニョフをは

9 私も、カザフ知識人が詩の形で発表した社会思想を論じたり、カザフ文学の簡単な紹介を書いたりしているが、全く十分ではない。宇山智彦「20世紀初頭におけるカザフ知識人の世界観：M. ドウラトフ『めざめよ、カザフ！』を中心に」『スラヴ研究』44号、1997年、1-36頁；同「カザフ文学の世界：アバイからスレイメノフまで」宇山智彦編『中央アジアを知るための60章』明石書店、2003年、106-110頁、など。

10 KOSHINO Go, "The Representation of the Belarusian Language in Contemporary Belarusian Literature," in MATSUZATO, ed., *Emerging Meso-Areas*, pp. 177-191.

はじめとして、空間表象の観点から帝国を斬る研究は非常に多い。ここで空間表象といっても、絵画や文学・論説よりも研究対象はかなり広く、たとえば統計を通じた地域のイメージ¹¹⁾、鉄道を誘致・敷設させるにあたって地方エリートがいかに関心の地域を語ったかなどが歴史研究の重大なテーマとなっている。AAASS 年次総会に参加すると、アメリカの歴史家の大半がこうした表象の歴史・ソフトな歴史を研究しており、経済や交通などの実態・ハードな歴史に関心を持つ者が少数派なのに驚かされる。しかし、これについては別にアメリカの後を追う必要はない。

小さな国の研究においても空間表象は重要だが、帝国研究においてその重要性が増すのは、次のような理由による。第一に、当たり前のことだが、領土が広く、地理的・民俗的多様性が著しいため、空間表象研究の良い実験材料になること。第二に、帝国は一般に膨張過程にあるか過剰膨張に苦しんでいるので情報コストが高く、精密な調査に基づくデータよりもイメージによって辺境への政策が選択される度合いが大きいこと。また同じ理由で、獲得地域に対して最初ある程度の調査が行われたとしても、いったん地域イメージが形成されると、地域政策はそのイメージから演繹的に決められるようになり、実態に合わせた修正がなかなか行われないこと。第三に、適正規模にあり稠密な軍と官僚制を持つ国民国家とは違って、過剰膨張に苦しむ帝国においては軍、官僚制、国境管理などの辺境統治の物理的機構は概して能力不足であり、辺境支配のためには支配を正当化する歴史言説のようなソフトパワーが果たす役割が大きいこと。第四に、帝国は概して多宗教国家だが、宗教においては、教義上も教会管理上も空間表象が重要な役割を果たす場合が多く、帝国はこうした宗教的な空間表象を操作しながら支配を安定化させようとする。

2. 帝国論の汎用性について

これについては、全評者により質問が出された。おそらく問題には3つの層がある。第一は、歴史学で過去10年ほど行なわれてきた帝国論と、ネグリ・ハート流の現代帝国論の間には大きなギャップがあるということである。たとえば私は、山下範久が編集した『帝国論』（講談社、2006年）に参加したが、執筆者の中で唯一、歴史的な帝国論を展開する私の章が論文集の中で完全に浮いているのに驚いた。おそらく二つの帝国論を架橋する作業は、歴史家と国際関係研究者の間の協業を必要としよう。これは私の力に余ることだが、最近の環黒海地域での地域紛争は、現代の国際関係の帝国性を考察するヒントを与えていると考える。

もし現代世界が主権国家体系の理念型を体現しているとするれば、グルジアやモルドヴァのような国がアメリカを口車に乗せて利益を引き出すなどということは考えられないだろう。主権国家体系は自立した市民で構成される契約社会のアナロジーで構想されたのであり、そこでは多重債務者が大会社の社長を手玉に取るようなことはありえないからである。弱者・周縁が意外なバーゲニング・パワーを発揮することは帝國的秩序の特徴であり、コーカサス情勢をこうした視点からフォローすることには意味がある。

問題の第二の層は、歴史的な帝国論の中でも、帝国そのものを論じているものは案外少な

11 これは、統計というものを客観的な事実を究明する手段としてではなく、より認知的にとらえる立場と結びついている。

いということである。ほとんどの研究は、ある地域や民族の歴史を理解する上で、その地域・民族が帰属していた帝国の一般的特徴を知ることが不可欠であるという事情から帝国を論じるのである。アンドレアス・カペレルがその典型で、アレクサンドル・セミョーノフは、これを「文脈としての帝国」(派)と呼ぶ。もう一つの立場は、帝国のメカニズムそのものに関心を寄せるもので、この立場にとっては、あれこれの民族・地域の歴史は帝国のメカニズムを解明するための材料にすぎない。帝国の様々な地域や、複数の帝国についての広く浅い知識を有していることが、この立場をとる者にとって必要な研究姿勢である。セミョーノフは、これを「道具 (instrument) としての帝国」(派)と呼び、ドミニク・リーヴェンや私の総督制研究をそこに含めている。塩川伸明の帝国論⁽¹²⁾や、最近では、アレックス・マーシャルのロシア参謀本部研究⁽¹³⁾もこのグループに入るだろう。歴史学の属性として、ほんの一地域の研究でも、文書館での長期間の作業と、しばしば新しい言語の習得が必要とされるので、「文脈としての帝国」派が圧倒的多数派であることは驚くに値しない。しかし、「道具・メカニズムとしての帝国」という視点を育成することで、前述の現代帝国論との間の対話はより容易になるのではないかと考える。

問題の第三の層は、帝国論の時間的射程の問題で、西山が論じている。西山は、「16世紀のスペイン帝国の隆盛から、20世紀の半ばのアジア・アフリカ諸国の独立を経てソ連の崩壊と冷戦の終了をもって終わった5世紀」にそれを限定すべきだとする。この時期区分は、おそらくヨーロッパ中心の世界システムを前提とした植民地帝国を典型とする帝国認識に基づくものだろう(したがって、清帝国の版図を継承した中華人民共和国が存続し続けていることは重視されていない)。確かに、世界システム論の影響を受け、東欧近世の地主貴族と国家との関係から帝国を論じたオレスト・サテルニーの名著⁽¹⁴⁾などは、こんにちでも輝きを失っていない。

しかし、過去10年間の帝国論は、こうした帝国の社会経済的な理解からは離れ、機構や理念の歴史により大きな関心を払うようになってきている。まず、ヨーロッパを中心とした、デイヴィッド・アーミテイジやJ・G・A・ポーコックなどの複合君主制の研究者は、複合君主制の概念的・機構的起源が中世にあることを強調するので、16世紀で歴史を区分する考えの対極にある。東ユーラシアや中国の帝国については、そもそも属人的で騎馬戦の戦力配置をモデルとした遊牧民国家が国制の基本にあるのだから、これも帝国論が古代にまで遡る傾向がある。近年、杉山清彦などが活発に論じているように、少なくとも大元から清帝国までは一連の歴史過程として見なければ、東ユーラシア・中国における帝国論は成り立たない⁽¹⁵⁾。

12 塩川は、最近著である『民族とネイション：ナショナリズムという難問』(岩波新書、2008年)では、ソ連帝国論よりもさらに視野を広げている。

13 Alex Marshall, *The Russian General Staff and Asia, 1800–1917* (London: Routledge, 2006).

14 Orest Subtelny, *Domination of Eastern Europe: Native Nobilities and Foreign Absolutism, 1500–1715* (Kingston: McGill-Queen's University Press, 1986).

15 特に、杉山清彦「明初のマンチュリア進出と女真人羈縻衛所制：ユーラシアからみたポスト＝モンゴル時代の北方世界」菊池俊彦、中村和之編『中世の北東アジアとアイヌ：奴兒干永寧寺碑文とアイヌの北方世界』高志書院、2008年、105–134頁が目される。

西ユーラシアにおいては、13世紀のモンゴル征西（アレクサンドル・ネフスキーの子ダニールを祖とするモスクワ公国の誕生もこの世紀）から、ビザンツ末期の東西教会合同運動への反感からモスクワ教会が事実上独立し、その隣でキプチャク・ハン国が分裂する15世紀半ばまでの約200年間に帝国の祖形ができた。その結果、モスクワ公国は、旧キエフ・ルーシ、旧キプチャク・ハン国、そしてコンスタンチノーブル教会（世界総主教座）の管轄地という3文明圏の辺境が重なりあうところで揺籃期を過ごすことになった。この類稀なる位置は、モスクワ公国に、上記の3文明圏を吸収する方向で膨張しながら、しかもそれを「征服」ではなく「故地の回復」や「権威の継承」であると認識させることになったのである（補説参照）。この事情は、清帝国が中華儒教文化圏、チベット仏教文化圏、大元の故地という3つの文明圏の辺境が重なり合うところに生れ、それゆえにこの3方向に爆発的に拡大したのと同じである。

15世紀以降、現代までのロシア史は、分析概念上の帝国としてではなく、まさに有機体的ように連続しており、どこかに鉄を入れるのは難しい。

このように、欧州、東西ユーラシアのいずれについても、帝国史の出発点は、植民地支配を可能にするような産業化、国民意識を形成する大量印刷技術の成立などの社会経済面での近代的現象とは無縁である。世界システム論が16世紀以降の帝国をそれ以前の帝国から区別しようとしたとすれば、近年の帝国論は、むしろ近代と前近代を架橋する視角を提供しているのである。

＜補説＞旧キエフ・ルーシの勢力圏については、故地の回復というスローガンが帝政末期のポーランド人、バルト・ドイツ人をめぐる論争に至るまで明示的に掲げられたが、旧キプチャク・ハン国領については事情はより複雑である。日本では栗生沢猛夫が実証主義の立場から、ユーラシア主義的な、キプチャク・ハン国とロシア帝国の連続説を一貫して批判している。2008年のロシア東欧学会・JSSEES合同大会のセッション「ルーシとロシア」（10月13日）においても、栗生沢は、モンゴル征西時には曖昧だったロシアとモンゴル勢力の精神世界間の関係が、まさにキプチャク・ハン国下で、同国のイスラーム化と、荒野修道院運動の高揚などによるロシア社会への正教の本格的浸透とによりかえって両極化してしまったこと⁽¹⁶⁾を、継承国家論を批判する論拠とした。これは、14-15世紀史の理解としては妥当だろうが、エリートや民衆の主観的な意識・言説を帝国継承性の有無の基準とする姿勢はあまりに頑なであるようにも思える。最近、トルコでは、オスマン帝国をビザンツ帝国の継承者とする歴史解釈も現れているが、歴史主体の意識や言説からはこれは証明できまい。今日のウクライナは、領土・住民・エリート・政治制度のいずれをみても、明らかにウクライナ社会主義ソヴェト共和国の継承者であるが、これはウクライナ人の言説・意識には表れない。

コンスタンチノーブル教会の管轄地への膨張を正当化する「第3のローマ」というスローガンは、15世紀に考案されて以降、絶えず掲げられたわけではない。正教は、古代5教会を最上位とし、その他の使徒教会を第2層に置き、それ以下の地域は、大要、自治教会を持つ

16 これについては三浦清美『ロシアの源流：中心なき森と草原から第三のローマへ』講談社選書メチエ、2003年、が詳しい。

た順にプレステージが決まる厳格な空間概念を有している。たかだか 10 世紀にキリスト教を受け入れたロシアがコンスタンチノープルにとって代るなどという驕慢な主張をするためには、コンスタンチノープル教会がよほど墮落しているか危機に瀕しているという認識が正教世界に共有されていなければならない。オスマン帝国の庇護のもとコンスタンチノープル教会がかえって勢力回復した 16–18 世紀⁽¹⁷⁾には「第 3 のローマ」論は影をひそめ、オスマン帝国の道づれでコンスタンチノープル教会も勢力低下した 19 世紀になって再浮上することになる。

3. 「専門性の高い研究成果を日本語で発表する意味」についてもっと積極的に論ずべき(鳥山)

これはまさに、シリーズに 3 論文(第 1 巻の第 2 章、第 3 巻の序章、第 1 章)を献ずるにあたって私が一番意識したことであり、鳥山がそこに着眼したことに感謝する。今後、日本のスラブ・ユーラシア研究が国際化してゆくとするれば、欧米、韓国などでそうであるように、世界的に認知されている査読誌(たとえば *Social Sciences Citation Index*⁽¹⁸⁾ に組み込まれている雑誌)に日本人が業績を発表する機会が増えてゆくだろう。もちろん英語査読業績の重要性は分野によって異なるだろうが、資料の言語、あるいは資料に近い言語で議論を組み立てることが有益な文学研究などでは、ロシア語が主要なコミュニケーション手段になるかもしれない。いずれにせよ、研究の国際化が進む中で、専門家も意識した日本語の論文集を出すことにはたして意味があるのだろうか。多くの新書・選書がそうであるように、日本語で書くときは茶の間の教養を目指した方がいいのだろうか。私はそうは思わない。業績の英語化・査読化は、研究内容にとって否定的な副作用も伴うと考えられるからである。

それは、原稿を通すために、なるべく査読でケチのつかないような書き方をする癖がついてしまうことである。大胆な仮説や時空を越えた比較よりも、査読者が違和感なく理解できる程度の「新しさ」に自分の企図を限定し、後はいわゆる実証性で勝負する癖がつくだろう。第 1 巻で、私は、脱共産主義期諸国における 3 つの異なる政治現象の比較を通じて、体制移行の空間力学を考察した。第 3 巻第 1 章では、「ヨーロッパにおいて複合君主制が果たした役割を、ロシアでは総督制が代行した」という命題を論じた。このような抽象度の高い論文は、欧米の査読雑誌にはまず掲載されない。ケチをつける理由が多すぎるからである。私が日本語の論文集に参加するにあたって意識したのは、単に書き下ろすということではなく、英語では絶対に発表できない、日本語読者限定のプレミアものを書くということであった。

日本語のようなマイナー言語を母語とする者にとっては、主に外国語で業績発表が求められることは、それだけ時間をとられるので不利である。しかし、向こうが書いたものは筒抜けで伝わってくるのに対し、こちらが書いたものは選択的にしか向こうに伝わらないという戦術的メリットがある。外国語で書くときの規範・エチケットと、母語で書くときのそれとは意識的に区別されるべきである。英語圏の査読雑誌がお行儀のよい原稿を好む傾向がある

17 Steven Runciman, *The Great Church in Captivity: A Study of the Patriarchate of Constantinople from the Eve of the Turkish Conquest to the Greek War of Independence* (London: Cambridge University Press, 1968).

18 [<http://scientific.thomsonreuters.com/cgi-bin/jrnlst/jloptions.cgi?PC=J>] を参照。

とすれば、日本語の非査読媒体は、ある種の放談を許す文化を持って欲しい（実はこれは、*Ab Imperio* が意識的にとっている戦略である。ただし私は、査読雑誌になれと同誌に提言しているボードメンバーの一人であるが）。

私は、深い思想を吉本喜劇のような軽妙な語りで読ませ聞かせる桃木至朗・阪大教授のファンだが、『海域アジア史研究入門』（岩波書店、2008年）の「総説」において、桃木は、通常の歴史学と「世界を歴史的に理解しようとする」こととは全く別、歴史家は一次資料に拘泥するので「世界を歴史的に理解する」のはむしろ苦手、マルクスもウェーバーもウォーラーSTEINも歴史学者ではなかったと指摘する（p. 5）。これは、今後の日本語・非査読媒体の生き残りの道をも示唆する指摘ではなかろうか。